

サンアイ創業35周年記念

**第2回
日本語エッセイコンテスト
～入選作品集～**



目 次

エッセイコンテスト結果発表	----- 3
最優秀賞作品 「日本のメディアから得られるスウェーデンの印象」	----- 4
優秀賞作品 「ブラウン管の中は別世界?!」	----- 7
優秀賞作品 「愛すべき埼京線」	----- 10
優秀賞作品 「日本の留学の一日目」	----- 13
入賞作品 「言語に隠された宝物」	----- 15
入賞作品 「勇気と希望をくれた男」	----- 17
奨励賞作品 「瞬間」	----- 19

サンアイ創業35周年記念 日本語エッセイコンテスト結果発表！

サンアイでは創業35周年を記念するとともに、北欧唯一の日本書店としてスウェーデンにおける日本語文化のより一層の普及を図ることを目的に、このたび第2回「日本語エッセイコンテスト」を実施いたしました。スウェーデン各地より12人の日本語学習者の方々がご応募くださいました。詳しい審査結果は以下のとおりです。

賞	題名	名前
最優秀賞	日本のメディアから得られるスウェーデンの印象	Tim Davidsson
優秀賞	ブラウン管の中は、別世界！	Fredrik Lindeberg
優秀賞	愛すべき埼京線	Lina Dahlberg
優秀賞	日本の留学の一日目	Jens Forsberg
入賞	言語に隠された宝物	Johan Nilsson Björk
入賞	勇気と希望をくれた男	Marcus Juveus
奨励賞	瞬間	Theres Wik

今回ご応募いただきました皆さま、および当コンテスト運営にご協力をいただきました関係各位には心よりお礼申し上げます。

当コンテストは可能であれば来年も実施したいと考えております。次回はさらに多くの方々から素晴らしい作品が寄せられますことを期待し、ご報告とさせていただきます。

サンアイ店長
上 条 寿 文

日本のメディアから得られるスウェーデンの印象

Tim Davidsson



受賞者のコメント：

初めてサンアイと言う本屋さんを訪ねたのは13年前、1998年の春のことでした。当時まだ中学生だった僕は日本文化に興味を持ち始めたばかりだった。そんな自分にとってこの本屋さんの存在はとても嬉しい発見でした。学校でさえインターネット環境がなかった時代だったのでサンアイさんは日本への唯一の窓口となりました。

そんな思い出が詰まったお店が今年で35年目を迎え自分がエッセイコンテストの参加者として、このおめでたい記念に関わることが出来た事を非常に嬉しく光栄に思いません。

選者のコメント：

スウェーデンの「国家ブランド」戦略に着眼した点がおもしろく、自分の主張を読み手に判りやすくまとめた論説文として高く評価されました。

2010年の春に大学のカリキュラムの一環として半年間日本でインターンシップをする事になった僕はその時初めて日本の新聞を毎日読むようになった。

日本の新聞を読んで気がついたのはスウェーデンについての記事が驚くほど多かった。何よりも気になったの新聞や他のメディアでのスウェーデンの圧倒的にポジティブなイメージだった。

卒業論文のテーマにしようと思って一年間で日本の新聞に載った全てのスウェーデンに関するまとまった記事（朝日・読売・産経・毎日新聞を含め）

を調査した結果45本の記事のうち26本がかなり好印象を与えるものだった。

それに比べて犯罪などの悪い印象を与える記事はたった1本だけだった。

記事の内容を見るとまた半数近くはスウェーデンの社会制度や福祉システムを取り上げるものだった。日本が今向き合っただ対応しようとしてる少子化・高齢化の問題を考えるとこの結果に説明が付くかもしれません。

しかしこの好印象もまたスウェーデン政府の機関によって意図的に売出している国のイメージにもぴったりと一致する。国が大金をかけて売出しているいわゆる「国家ブランド」がこれほどに日本の報道で忠実に紹介されていとスウェーデンの広報外交機関の活動の影響も大きいのではないだろうか。

ジャーナリズムを学ぶ学生として業界に様々なジレンマが存在しているのは勿論理解しているつもりです。報道とは権力に対して批判できる立場にあるべきと同時に権力とある程度の友好的関係を保たないとない情報を得られない場合もある。日本の記者クラブもその例の一つでしょう。

メディアは社会の機能の一つであると同時に商売でもある。真実を伝える義務を背負いながらも読者が求めている様な面白くて刺激的なニュースを提供しなければならない。それと裏腹に真実とは時に退屈で地味で複雑なものだったりする。

スウェーデン人としては自分の出身国が凄く良い所と言うイメージが日本に定着して勿論不利にはならないし自分の国が日本のメディアで褒められると悪い気もしない。

ただし美化過ぎるのも考えものです。残念ながらこの好印象は現実と完全に噛み合っていない所が存在するのもまた事実です。自慢の福祉の分野でも国民が仕事を病欠する場合の収入保険が近年に期限付きになった。その結果として癌などの重い病気を抱えた人たちが収入を失い就職活動は始めざるおえない実態が発生しスウェーデンでは大きな政治問題となっている。しかし日本のメディアではこのような件は全く取り上げられていない。

両国のより親密な友好関係を望む者としては日本の皆さんにスウェーデンの正確で正しい知識を持って頂く為にはもうちょっと日本の記者さんに頑張って貰いたいと思います。スウェーデンにも若者の莫大な失業率（それもヨーロッパ二位の）や犯罪など問題と向き合うには日本から学べる事は沢山あります。それを踏まえた上でまたこれからも末永くよろしく申し上げます。

ブラウン管の中は、別世界？！

Fredrik Lindeberg



選者のコメント：

日本語表現を見事に使いこなし、エピソードと主張を上手に噛み合わせた点が高く評価されました。

受賞者のコメント：

今回のエッセイは、日本での生活を思い出しながら書いたのですが、その作品で優秀賞を取ることが出来てとても嬉しいです。日本は私にとっては第二の国ですし、心の故郷です。又、機会を作ってぜひとも日本へ行きたいと思っています。そして、又次の機会にもエッセイを書きたいです。（その時は、最優秀賞を取りたいです。笑）
とにかく、ありがとうございました！

僕は、昔から日本のアニメやテレビ番組が大好きだ。特に、日本には多種多様なバラエティー番組が沢山あって、いつどんな時でもテレビをつけると退屈することが無い。日本に行く前からも、行ってからも娯楽の一つとしてテレビを見ることを楽しんでいた。そして、2010年の春から1年間、京都大学で勉強する機会を得たので、日本語の勉強のためにも日本でいろいろな番組を見ようと決めて、日本へ行った。

そんなある日、日本人の友達数人と大阪の心斎橋へ遊びに行くことになった。心斎橋は以前にも訪れたことがあり、何となく町の様子を覚えていたが、ある町角を通りかかった時、大勢の若者が奇声のような歓声のような声を上げているのである。

「あれっ？ 何か起こったの？ そっか、ここは心斎橋だ。すごく有名なコメディアンでもいるのかな？」 と思った。近くにいた友達に、「あそこに誰がいるの？ ダウンタウンの松本、明石家さんま？」 と、聞いてみた。すると、「いやいやそんな大物ちゃうで。せやけど、一応テレビに出てる人

やからな。ええっと、銀シャリちゃうかな？」 「銀シャリ？ あんまり聞いたこと無い名前だな。

スウェーデンでも、結構有名な歌手や俳優、政治家なんかをストックホルムの町で時々見かけることがある。しかし、周りの人は特に反応をしない。見て見ぬふりだ。もちろん、スウェーデンは日本に比べると小さな国で、人口もずっと少ない。しかしながら、有名人は有名人だ。テレビにもよく出ている人もいる。

「この差は一体なんだろう？」 ふと疑問に思った。我々スウェーデン人の感覚からすると、彼らは有名でそれぞれに才能ではあるけれど、たまたま歌手や俳優、又は政治家という職業を選んだ人、とと思っている。少し大袈裟に言うと、僕も彼らも同じ国に住んでいる一スウェーデン人で、そう言った意味では大差はない。又、有名人はテレビに出ているときは、有名人だけど、町の中では一般人なので、そっとしてあげるのが、彼らに対する敬意だと考える。

しかし、日本の様子は少し違う。有名人は騒がれてナンボ。町の中で誰にも見向きもされなければもう有名人ではない。要するに、有名人は普通の人間ではなく、特殊な人達なのである。町で騒がれることが、ある種の敬意の表現なのかも知れない。

これは、国民性の違いだろうか。別にどちらが良いのではなく、我々スウェーデン人は個人主義で、日本人は集団主義なのではないか。そう考えると、「なかなか面白いなあ、。」と、思う。

話を元に戻すと、その銀シャリに僕の日本人の友達が、「一緒に写真を撮ってもいいですか」と、聞いてみた。すると、銀シャリのマネージャーらしき人が来て、「いや、悪いけど彼らも忙しいし、一人と撮ると皆と撮らなアカンから、お断りしますわ」と、言った。が、その時 ちらっと僕の方を銀シャリが見て、「でも、せっかく外国から来ている人もいるから、彼とだけ写真を撮ってもいいよ」と、言ってくれたのである。

それがこの写真である。お蔭さまで、日本人の友達の羨望を受けながら彼らと一緒に写真に収まることが出来た。

そして、これはすごいことらしい。この写真を見た何人もの日本人の友達から、「うわあーすごい、テレビに出てる有名人と一緒に写っている！」とのコメントをもらった。

僕はそれまで銀シャリを知らなかったが、それを機会に彼らの出ている漫才を見るようになった。「うーん、なるほど、面白いかな、。」

とにかく、彼らはテレビに出ている有名人で、僕はその彼らと一瞬でも同じ所に並べたんだ。日本の社会に少し入れたようで嬉しかった。

終わり

愛すべき埼京線

Lina Dahlberg

選者のコメント：

体験したことを豊かに表現し、次はいったい何が起こるのかと読者をわくわくさせる小説のような作品です。

受賞者のコメント：

3位になったことは私にとって大きな驚きです。それに、選ばれて、光栄です！私にこのコンテストを紹介してくれた小笠原先生にとっても感謝しています。先生が私を励ましてくれたから頑張れて入賞できたと思います。この受賞をきっかけに私はもっと書く練習を続けて上達したいと思います。どうもありがとうございました。



私は日本に少ししか住んでいなかったけど、その生活は 25 年の人生で一番驚くべきものだった。その主な理由は、毎日、日本で一番痴漢が多いと言われる埼京線で通学していたこと。もう一つの理由が私はマグネットのように変人とか変な事を引き寄せる。危険なコンビだ！

とにかく、これからはその悪名高い路線についての色々な経験を聞かせたい。

私は 1 年ちょっと埼玉県に住んでいて学校は新宿の近くにあった。そのため、毎朝、40 分ぐらい満員電車に乗った。ほとんど座ることができなかつたし、立っているのも人が多すぎるので押されて大変だった。でもすぐにそれは立って寝やすいことに気付いた。つまり、ほとんど動けないので目を閉じれば寝られる！時々誰かの背中で寝ることがあつたし、よだれを付けてしまったこともあつた。その人が気付かないように神様をお願いした。そして、座っている時に隣のおじいさんが、私の肩で眠りに落ちる経験もあつたけど、それはたまに意図的だつたと思う。ある日私は、バイトから帰る時、つい高校生の肩で眠りに落ちてしまった。目が覚めた時、彼は友達に笑われていて凄

く顔を真っ赤にしていた。私は直ぐ謝ったけど彼は緊張していて返事ができなかった。

高校生の男子、これを読んだら、ゴメンネ。

私にとって、池袋駅は他の駅と比べたら、最も奇妙な駅だと思う。池袋駅の一番線と四番線のホーム（埼京線の）で、次の事を見てきた。朝のラッシュアワーの最中にサラリーマン二人が叫びながら戦っていた。かばんを野球バットのように振り回して、相手を攻撃していた。とか、スリが私服警官に捕まえられた。他には痴漢が泣きながら、駅員に両腕を持たれて運ばれて行くのを見た。線路に落ちた人も見た。等・・・

そしてある日、池袋駅で、友達を待っていた時、おじいさんが話しかけてきた。日本に来たばかりの私はあまり日本語が分からなかったから、間違ったことがいっぱい起きた。そのおじいさんは凄く温厚だし、我慢して私とゆっくり話して、いい人だと思った。でも急におじいさんが「行こうか」と聞いて、分からない私は「何で？どこ？」と返事した。おじいさんが何かと言っていたけど私は全然理解できなかった。そして、その人が怒って大きい声で「エッチ」と言った。でも私はその言葉を聞いたこと無かったから、「エッチって何？」と質問した。おじいさんはイライラしてきて、「セックス・・・セ・ク・ス！」怒りながら返事した。私はよく考えて、「セックス」という言葉を知らないという結論に至った。「日本語が大変だな」と思って「すみません、全く分かりません」と言った。それで、彼の顔は火が付いたように赤くなって汗がたくさん出っていた。おじいさんを怒らせてしまって・・・恐かった！

諦めないおじいさんは財布を出してお金を数え始めて、30000円ぐらい私の顔の前で振った。「あ！セックスってSEX！」やっと理解できてすぐに断った。その遣り取りが注目を集めていたのにおじいさんは気づいて、すごすごと逃げていた。残念だけど優しいと思っていたおじいさんは実はヘンタイだった。最悪だった。

別の事件は池袋駅四番線のホームと埼京線の中で起きた。電車がもうすぐ出発で、ドアが閉まりそうな直前に電車に飛び乗った。ギリギリSAFEだった！しかし、電車の中は誰もいなくて「違う電車かな・・・」と思って周り

を見ていると一番奥で一人の男の人が座っていた。「不思議だな」と思っていたけど空いた席を見てその不安な気持ちをすべて忘れていた。

家まで40分もかかるので、本を読むことにした。読書をしていても少し気になった。彼の方をちらっと見てみると、奥に座っていたはずの男が近くに座っていた。「可笑しい」と思い続いても、本を読み続けた。もう一回、彼の姿の動きを見た。今回、前より近くに座っていて、ずっとジロジロ見てきた。いつの間にか私のそばにきた！

そして、彼は何かを持っていることに気付いた・・・それは頭が黒い袋で包装されている少女の人形だった。この気持ちの悪さがドンドン増えて恐怖の感じになってきた。彼はその人形の頭をなでながら、自分の頭の上に人形を置いていた・・・「何これ?!」と思って限界を感じた私は携帯電話で通話するふりをして次の駅で電車から逃げ出した。

あんな人がいたから、車両に人がいなかったんだと後で気がついた。

最悪だった。

あの国で体験した不思議なエピソードにもかかわらず、日本にいた時は人生で一番嬉しかったし、一番楽しいかったし、文化をいっぱい経験していた。私は日本が好きじゃないというような印象を持たないでください。その反対、あの国が大好き。それに日本には、完成とか完璧な所が存在していないと思う。あつたら、結構詰まらないじゃない？それに生活の中でいくつか奇妙なことがあれば人生がもっと面白くなると思う。

日本の留学の一日目

Jens Forsberg

選者のコメント：

留学第一日目の体験談を、豊かな日本語表現で面白く描写した、読者を楽しませる作品です。

受賞者のコメント：

私は友達とストックホルムをぶらぶら散歩した時に、サンアイに寄ることにした。店から出る前にドアに張ってあったエッセイコンテストについての紙を見かけました。とても面白そうで素敵な賞がいくつかあることと分かり、参加してみようと思いました。その日から数日の間に私の日本の一日目の経験について書いていました。エッセイを店にメールで送り、何日かが経った後サンアイからのメールを貰い、優秀賞を受賞したと分かり、嬉しい限りでした。



私は 2010 年に勉強するため、日本へ留学に行くことになりました。日本に行ったことがなかった私は、わくわくし、楽しみにしていました。しかし、日本の一日目にとっても独特な出来事に遭遇しました。その経験を語ろうと思います。留学した大学は神奈川県にある東海大学でした。夜に成田空港に着く予定だったので、一日目に東京の都内に泊まれば良いと思っていました。早めにホテルを予約せずに成田空港に着き、予約ができると思い、のんきに日本に向け、旅立ちました。長距離のフライトを終え、飛行機はようやく日本に到着しました。私は飛行機を降り、ホテルを予約するという目的で空港内のインフォメーションセンターを目指しました。そこで係員にいくつかのホテルが書いてあるリストを貰い、リストに書いてあったホテルに電話をしました。日本語がなかなかできない私は、片言の日本語で向こうの方と話し、

予約しようと思いました。突然、向こうの方に「タトゥーはありますか？」と聞かれ、「いいえ」と答えた後、予約が可能でした。その後、空港から新宿に行き、ホテルを探し始めました。日本の事を全く知らなかった私は、空港で貰った地図を見ながら、ホテルを探しました。気がつくと、歌舞伎町に辿り着きました。そのころの私は、歌舞伎町がどういったところか知らなかったうえ、歌舞伎町で宿泊するつもりも言うまでもなく全くありませんでした。早くホテルに着きたかったのですが、途中で怪しそうにうろうろしていた人たちに「俺のクラブに行かない？」や「どこに行くの？案内しようか？」と声をかけられました。私は、どんどん不安になり、焦りかけました。その後、なんとかホテルに着きましたが、ロビーに入ると、裸で腰にタオルしか巻いていないおじさんばかりがいました。「これは一体何なんだろうか」と思い、戸惑いました。長旅で疲れた私は、自分の部屋でゆっくり体を休ませたかったのです。しかし、自分の部屋で休むどころか、温泉があるカプセルホテルを予約したと分かりました。さらに、腰にタオルを巻いただけのおじさん達とタトゥーの質問の意図にもピンと来ました。留学予定は一年だったため、荷物が非常に重かったのですが、荷物を置くスペースもなく、日本語でとても速く話す店員さんにも相談が出来ず、大変でした。少し焦った後、ハワイ人に話しかけ、その方に英語でカプセルホテルについていろいろ説明してもらいました。その説明やカプセルホテルの良さ（例えばレストランやリラクセスフロア）が分かったお陰で、私の不安は徐々になくなり、気分が楽になりました。

こうして私は、日本の留学一泊目を、穴のような部屋のカプセルホテルで過ごしました。この経験は、カルチャーショックというか、私にとって衝撃的なスタートだったかもしれませんが、この経験から始まった一年間の日本の留学は、最高に面白く、とても良い時間でした。

言語に隠された宝物

Johan Nilsson Björk

選者のコメント：

日本語とその背景にある文化とのつながりを深く考察した好エッセイとして評価されました。

受賞者のコメント：

スウェーデンにも日本語の作文コンテストに参加できて面白かったです。日本語についての自分の持っている感想や思考を述べられました。私の日本語はまだですが、よかったらエッセイを読んでください。



言語をよく見れば水面のしたにそれに繋がっている文化が泳いでいるのが見えるだと思う。どんな言語でも文化に影響を受けて変わったりして、文化も統合している言語に逆に影響を与えられるだろうが、日本の場合は特にそれがあるように思う。

文字としてだけでなく自体で豊かな意味を持つ漢字、人の格式を分離している敬語などの複雑な言い表し方、はっきり内心を語らないという現象、不必要と思う情報を除いて途中で文を終えてもよいという現象など、様々な特徴が日本語にはある。この特徴があることに日本の文化が見えると思う。

まず、漢字は中国から輸入されたといわれる。中国語にある言葉をそのまま日本語に入れたから、今はもう日本語の当然な部分として扱われるが、元々は中国の考え方や価値観も言葉とともに輸入されたではないか。漢語と和語という表現がある訳だ。特に中国から由来していることわざは日本人の考え方を影響したと考えられる。

敬語が丁寧語、謙譲語、尊敬語、丁重語、美化語といった様々な種類で分類された複雑なシステムである。日本人でも頭をぐるぐさせるといわれる程複雑なシステムがあるということには日本の丁寧さを強調している文化がよく映っていると思う。で、こんなシステムと概念があるからこそ、話相手より丁寧になるように敬語の達人が競って、さらなる敬語を難しくしていたことも

あったかもしれない。意味を考えたら滑稽だが、丁寧さの戦いと呼んでもよいことがあった・・・と想像はできるよね。

逆に、丁寧に振り舞う文化があったが敬語のシステムがなかったの場合、グローバル化の風によって今頃もうその丁寧さの概念が吹き飛ばされたと思う。

いいたくない情報を除いて途中で文を終えるのは日本の文化の特徴を一番強く示していると思う。日本語を学び始めるときほぼ初めて教わるのは「日本人ははっきりいうのは嫌だ」ということであった。スウェーデン語や英語などの私が日本語を学ぶ前に接触していた言語ではちゃんと文に必要な情報で満たさなければいけない。でも日本語ではそれはない。例えば、断るときの「それはちょっと・・・」という表現は断る理由を言わずにただ断ること自体を提供するのだ。でも例えば私の母語のスウェーデン語ではそれだけの言葉だけでは文法的に間違っているし、何より理由なく断るのは水臭くて、失礼と思われる。偽りの理由でも言わなくてははいけない。だが日本ではそれはない。理由なしでいっていいとされている。これはたぶん日本人は他人のプライバシーをすごく尊重しているからだと思う。

このように言語と文化が繋がっていることはとても面白いことだと思う。日本語を学ぶのは同時に文化と、日本人をすこしずつ分かることと考える。どんどん日本語という海に深く潜れば文化を示す宝物を見つけられるのは言語学習のとても素敵な点だと思う。

第 2 回「日本語エッセイコンテスト」入賞作品

勇気と希望をくれた男

Marcus Juveus



選者のコメント：

こなれた文章力で、スーパーマリオとの出会いを愉快地に表現した作品です。

受賞者のコメント：

どんどん咲いている日本の文化に興味深い僕にとってこのエッセイ CONTEST がとても楽しかったです。 また来年は挑戦させていただきたいと思います。

僕と日本の付き合いは本当に長いです。振り返ってみると、もう 20 年も経っているのではかなと思います。全部がスウェーデンの小さな町で始まったのです。ママが任天堂を買ってくれたことからであるのです。

幼い時、僕が元気な子で友達が多かったです。よく、おじさんとキャッチボールやったのも覚えています。

でも、兄弟もいなかったし、パパがいなくなってから寂しかったのです。たぶん、自分もうわかっていたのに「もう引っ越さなきゃいけないの」とママに言われて、涙が止まらなかったのです。僕はもう 1 人だ。そう思いました。

知らない町、知らない幼稚園、緊張していながら暮らし始めた。1ヶ月ほど経って他の子と話はまだちゃんとできていない。まだショックを受けたのかもしれない。先生はいつも「大丈夫よ」となぐさめてくれたけどあの言葉が耳に挟まなかった。

その日、幼稚園が終わって、ママが向かえに来てくれるのを待っていた。ママは以外とにぎやかだった。うるさかった。僕はなんも言わないで、ただ車の助手席に乗った。「急ごうね！ 今日、友達が家で待っているのよ」と

ママが言い出した。おじいちゃんでも来ているのかなと思って、ちょっとうれしかったけどなんもいわないことにした。

帰ったら、そこにはおじいちゃんじゃなくて、会ったことないちょっと太っていた南欧系のおじさんだった。

それがスーパーマリオとの出会いだった。

さっそくカセットを入れて、コントローラをぎゅっと握って、スタートを押した。

とりあえず、前に進もうと思って、マリオが走り出してくれた。前に怖い怪物が近づいてきた。でも、マリオがきれいに跳んで敵を避けてくれた。王女さんは助けなきゃ。マリオは自分の命をかけて、好きな人のために必死に頑張っているのです。崖から落ちてしまったって登ればいい。溶岩に溶かしたってよみがえればいいんだ。その時、愛情の意味も、友情の意味もわかったような気がした。

僕はもう一人じゃないってことが分かった

その次の日、幼稚園の男の子と一緒に家に帰って任天堂をやっていた。年月が経って、また引っ越すことになった。でも、今回はなんも悲しくなかった。任天堂を持ったから大丈夫だ。そう思いました。

任天堂は色々教えてくれたし。任天堂は人々を結びつける力を持っていると思います。

瞬 間

Theres Wik



選者のコメント：

日本の文化に出会った感動、日本語学習への熱意が伝わってくる作品です。

受賞者のコメント：

こんな長いエッセイは前、書いたことがないから、この競争がすごくいい勉強になって、楽しかったです。まだ日本語が上手くないから本当にいいチャレンジでした。サンアイの皆様に、この競争をアレンジして、ありがとうございます！

人は誰でもの人生にはある瞬間、ある発見、それともある重要な出会いがあって、その瞬間によって将来が決定して、存在も変わるかもしれません。私はそう思います。その瞬間は運命か偶然か分かりませんが私の場合、将来が変わっていた重要な瞬間が三つあります。

子供の時、私はポケモンやセーラームーンをいつも見て、日本から来たアニメだった知らなくて、ただの面白い子供番組だった。しかし中学校の時、ビジュアルアート クラス中に中国出身の女の子と話しました。「絵を描いてあげる」と女の子が言いました。絵がマンガ風に描いて、大好きなセーラームーンの絵で、びっくりしました。

「うわあ、私もこんなキレイなマンガ女性が描きたい！」と考えました。

実は、今、その絵を考えるとあまりキレイではなくて、でもその絵が大きなインパクトでした。同じ日に、家に帰った時、すぐにインターネットでマンガ女性を探し、描くのが始めました。特に美しい女性を見つけました。

「吸血鬼 美夕」でした。アニメも見つけて、好きになりました。

2006の夏、スカウトキャンプに行きました。キャンプで大阪から来たスカウトがいました。私は日本語が話せなくて、日本人のスカウトと話したかったです。

ある朝、日本人の女の子を見て、今チャンスだと思いました。あまり自信がなくて、勇気を奮い起こして「おはようございます」と挨拶しました。日本人の女の子がすごくびっくりしましたが、「おはようございます」と笑いました。

キャンプの最後の夜、日本人のスカウトが皆に漢字を書いてくれて、茜ちゃんと言うの先の女の子に「日本」の漢字を書いてくれませんかと聞きました。

その「日本」の書いてある和紙は今でもつくえのうえにあります。本当に大切な思い出で、日本人と初会合でした。

キャンプの後、私は日本語が話したいと思って、自分で勉強を始めました。

日本のテレビ番組をたくさん見て、夜クラスも出席しました。

でも一番重要な瞬間が、2008年10月に夜遅く、起こりました。

偶然でテレビを点いて、大好きなアニメが映しましたが、見ながらびっくりしました。字幕スーパーの翻訳が誤訳しました！信じられなかったんです。

その時、決めました。私は訳者になります。日本語が話せない人に完璧な翻訳してあげたいです。だから、フィンランドに古里を離れて、日本語を勉強するために、ストックホルムに引っ越しました。

今、日本語の勉強して頑張るので、日本の全てのことを皆に伝えたくて、私が訳者になる夢を追いかけ続けます。

協賛

- スリーエーネットワーク <http://www.3anet.co.jp/>
- OCS Europe <http://www.ocseurope.co.uk/>
- Net Travel <http://www.japanspecialisten.nu/>
- OKURA <http://www.oapsa.com/>
- 湊水産

第2回日本語エッセイコンテスト審査員

今回のエッセイコンテストでは、下記4名の方々に審査いただきました。

上田祥一（日本大使館文化担当書記官）

三瓶恵子（ノンフィクション作家）

田中 昇（ストックホルム日本人補習授業校校長）

ビヤネール多美子（ジャーナリスト）



主催： 日本書店サンアイ

Sun Ai Scandinavia AB

Tégnergatan 15, 11140 Stockholm

Hemsida: www.sunai.se, e-post: info@sunai.se

発行：2011年6月